

博士論文要約

論文題目

看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論の構築
ーメタ統合を通じた包括的な概念の創出と事例による検証ー

Development of a Middle-Range Theory Regarding Community Group Support by
Nurses: Creation of New Comprehensive Concepts with Meta-Synthesis Methods and
Evaluation by Nurses

千葉大学大学院看護学研究科看護学専攻

植村 直子

Naoko Uemura

I. 研究の背景

1986年にWHOがオタワ憲章を提唱して以降、各国でヘルスプロモーションの理念を重視した看護実践が取り組まれてきた。

日本においては、2000年に21世紀における国民の健康づくり運動（以下、健康日本21）の評価の結果、健康を支え、守るための社会環境の整備が課題とされ、2013年の第2次健康日本21においては、ソーシャル・キャピタルの向上、すなわち地域のつながりを強化することの必要性が示された（尾島，近藤，米澤，2013）。欧州や北米においては、1988年に提示されたヘルシー・シティー・プロジェクトを機に、各都市に住む人々のwell-beingを高めること、地域に基盤を置いたヘルスプロモーション活動を発展させることを目指した取り組みがなされてきた（島内，助友，2000）。このように、ヘルスプロモーションの理念を基に、コミュニティの人々の健康を支援するうえで、「まちづくり」「地域づくり」といった視点を踏まえた活動が進展してきているが、具体的な実践としてコミュニティグループへの支援が不可欠である。

看護職は疾病の予防および健康の回復・健康づくりという点でコミュニティグループに注目して活動してきた実績がある。日本においては、生活習慣や生活環境の改善などの課題に対して、地域単位や職場単位、もしくは健康課題別単位のコミュニティグループを対象に、看護職による支援が成されてきた。海外においては、主に貧困層や移民など健康上のリスクのある人々のコミュニティに対して、コミュニティグループの支援を通じた看護実践が取り組まれてきた。コミュニティグループは、個人、家族、集団、地域を変化させるのに有効であることが言われており（Lassiter, 2004）、国内外におけるコミュニティグループ支援に関する看護研究は蓄積されつつある。それらの先行研究では、調査対象とする国や人々、またグループの種類や数を限定した記述的な事例研究、もしくは目標に到達するための看護

職の行動を記述した実践理論(Jacox, 1974)レベルでの知見が示されている。しかし、異なる背景や状況における様々なコミュニティグループの共通性や差異を包括し、かつ実践理論で示される看護職の行動を導くための方向性を示した中範囲理論(Walker & Avant, 2005)は示されていない。

II. 研究目的

本研究は、コミュニティグループへの看護職の支援に関して、看護職がどのようにグループ支援における難しさを乗り越え、支援を展開しているのかという視点から、国内外の先行研究の知見を統合することを通じて、看護職によるコミュニティグループ支援の方向性を示す中範囲理論を示すことを目的とした。

III. 研究の構成

本研究は、メタ統合のリサーチクエスチョンを検討する研究1、メタ統合により看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論の原案の作成を目的とする研究2、および、研究1と研究2により作成した看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論原案の検証を目的とする研究3で構成した。

IV. 倫理的配慮

本研究は千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を受け実施した。研究対象者へ研究協力内容の十分な説明を踏まえた研究協力への任意性の保証、研究によって生じる対象者への不利益を最小限にする配慮、個人情報保護等について配慮した。

V. 用語の定義

本研究では、コミュニティグループを、当事者グループと住民組織のうち、自己変容と社会変容の両方の機能をもつグループとした。

VI. 研究1

研究1は、メタ統合のリサーチクエスチョンを検討することを目的とした。

Spencer & Spencer(1993)のコンピテンシーモデル、Hase & Davis (1999)、および Cairns & Stephenson(2009)のケイパビリティの概念に基づいた、グループ支援の看護実践能力の研究枠組みを作成し、保健師5名へのインタビュー調査により、コミュニティグループ支援の難しさと対処法をたずねた。その結果、難しさは、「グループが継続した先の支援の方向性への迷い」等の4カテゴリーであった。コンピテンシーは「経験豊かな保健師との対話を通じた保健師としてのグループ支援の考え方の学びの習得」等の5カテゴリーであった。ケイパビリティは、「自身が支援するグループメンバーやグループの状況に適する支援方法の模索」等の6カテゴリーであった。以上より、「コミュニティグループ支援での看護職の

認識と行動は、コンピテンシーとケイパビリティで構成される看護実践能力により、どのように説明できるか」等のリサーチクエスチョンを設定した。

Ⅶ. 研究 2

研究 2 は、看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論原案の作成を目的とした。Paterson の手法を用い、CINAHL 等で 225 文献を選定、評価し、分析対象 8 論文を決定した。論文中のコンピテンシーとケイパビリティの記述を看護実践能力のデータとし、帰納的に要素と概念を創出した。また、グループメンバーの認識と行動の変化の記述をデータとし、要素と概念を創出した。

その結果、3 概念《看護職としてのあり方》《グループ支援の方向性》《個と地域のニーズの実現》が創出された。《看護職としてのあり方》は、4 つの要素〈学びあう姿勢による信頼関係の構築〉〈支援関係者との協力関係の重視〉〈状況に応じた支援方法の模索〉〈多様さへの理解による支援技術の向上〉で構成された。次に、《グループ支援の方向性》は、4 つの要素〈個と地域のニーズの実現のビジョン化〉〈メンバーの交流による主体性発揮の促進〉〈地域との交流によるグループ活動の活性化〉〈グループのニーズの保健事業への反映と協働〉で構成された。そして、《個と地域のニーズの実現》は、3 つの要素〈支え合いによるグループ活動の継続〉〈メンバー個々の健康課題への対処〉〈協働による地域の健康づくりの推進〉で構成された。また、看護実践能力である 2 つの概念《看護職としてのあり方》《グループ支援の方向》が相互に機能し、メンバーとグループへの効果の概念《個と地域のニーズの充足》を生み出す構造が示された。

Ⅷ. 研究 3

研究 3 は、中範囲理論の原案の妥当性と有効性の検証を目的とした。

妥当性では、実務経験 10 年以上の保健師 4 名へのインタビュー調査により、中範囲理論原案の概念と要素が、対象者のコミュニティグループ支援事例と一致するかを確認した。有効性では、実務経験 10 年未満の保健師 3 名へ、中範囲理論原案の概念と要素について、対象者が実践している要素と今後の課題である要素を確認した。看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論原案の妥当性、および有効性の検証の結果、各概念、および各要素は妥当であると判断した。しかし、各概念と要素の表現、および、各要素の説明内容については、より分かりやすい表現に修正する必要があると判断した。

Ⅸ. 考察

1. 原案の修正による看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論の構築

研究 3 の検証において得られた、本中範囲理論原案全体への相対評価結果、および、各概念と要素に該当する対象者の事例内容の表現を基に、研究者が各概念と要素の内容と構造の理解をさらに深め、どのような表現が適切かを判断し、各概念と要素の表現、および各要

素の説明内容の表現を修正した。その結果、看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論を、3 概念、11 要素で構成されるモデル、および、各概念を構成する要素の説明文で構築した。

概念《看護職としてのあり方》は、4つの要素〈メンバーの思いや強みを尊重した学び合う姿勢の保持〉〈地域の様々な支援関係者との協力関係の重視〉〈メンバーの状況や反応に応じた支援方法の模索〉〈グループの多様さへの理解による支援技術の向上〉で構成される。次に、概念《グループ支援の方向性》は、4つの要素〈メンバーが自分達らしくニーズを実現していくことに寄り添う支援のビジョン化〉〈学び合う場の提供によるメンバーの意欲喚起の見守り〉〈地域の資源とグループがつながることによる活動の定着と活性化〉〈グループのニーズの保健事業への反映と協働〉で構成される。また、概念《個と地域のニーズの充足》は3つの要素〈メンバー同士、メンバーと地域の人々との交流によるグループ活動の推進〉〈メンバー同士の交流の楽しさと支え合う関係の形成によるセルフケアの向上〉〈メンバーと支援関係者、地域の人々の相互に有益な関係の形成〉で構成される。

そして、《看護職としてのあり方》と《グループ支援の方向性》というコミュニティグループ支援の看護実践能力の2つの概念が相互に機能し、《個と地域のニーズの充足》というメンバーとグループへの効果の概念につながる構造を示した。

2. 看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論の特徴

看護職によるコミュニティグループ支援の先行研究では、看護職がコミュニティグループに対して、どのような支援内容を実施しているのか、支援内容の詳細を示したものが多かった。つまり、これまでの先行研究の知見は、看護理論の知識体系において実践理論、もしくは記述理論に相当する知見であった。本研究における看護職によるコミュニティグループ支援の中範囲理論は、実践理論・記述理論に比べ、多様なコミュニティグループ支援への活用範囲が広く、一般的な理論である特徴がある。また、既存の看護職によるコミュニティグループ支援の大看護理論・概念モデルに比べ、実践での検証が可能であり、かつ、《看護職としてのあり方》《グループ支援の方向性》という2つの概念が相互に機能し、アウトカムである《個と地域のニーズの充足》の概念につながるという構造を示しており、大看護理論に共通する簡潔さを持つところに特徴があるものと考ええる。

本中範囲理論は、看護職が自身のコミュニティグループ支援の実践を振り返り評価すること、看護職が支援関係者等の他者とコミュニティグループ支援の方向性を共有し、話し合うためのガイドとして活用することができると思う。

X. 本研究の限界と課題

本研究の課題として、本中範囲理論が、複数の看護学研究者、および看護実践者によって実践と研究に活用され、繰り返し検証されることによって、より実践に役立つ理論として精錬されていく（上村,本田,2005）ものと思う。